

講演

「南秀魂」について

宮古高等学校

序言

ただ今御紹介頂きました、真栄城徳佳でございます。

先ほど校門に入る前に、あの宮古高等学校と言う力強い文字を目にした時、卒業後六十六年ともなりますと、さすがに懐かしさで感激いたしました。が、一歩校内に入りますと盛島明長先生の胸像を拝し感動で胸が熱く心ふるえる思いが致しました。先ほど校長室で平良知枝子先生とお話し合う時間がございましたが、この様な立派な先生方が長年綿々と次世代・後輩達の教育に精励されていることに宮古高等学校はもとより宮古島市、沖縄の未来を見るようで大変ありがたいと心強い思いがいたしました。そして今皆さんの前に立ちますと緊張と喜びで身の引きしまる思いをしております。初孫を抱いた時の喜びと緊張と同じですね。私から見ますと皆さんは眩しい位未来に輝く孫達のようなのですが、今日は私も講演と言うより講話のつもりで話しますので皆さんもリラックスした気持ちで聞いて下さい。高校三年の皆さんにとって今年は高校生活のゴールであると同時に新しい進路へのスタートでもあり、おめでとうと心から声援を送りたいと思います。

私は宮校二期生で昭和二十五年（一九五〇年）卒業いたしました。実は沖縄南秀同窓会会長の平良品先生から南秀魂についての第一回講演を依頼されたのは昨年一月でございました。多くの優れた方々の

おられる中で不肖私如きがと迷いましたが、平良会長の御熱意と私は昭和七年生まれ、昨年は私の七回目の申年(干)で、その上全国日本学士会の七十周年記念に当り私が副会長とのことで実行委員長を命ぜられました。こうも七の数字が三拍子も揃いますとこれも私の何かの因縁かと運命的な思いもあり、後輩達の何かのお役に立てれば大変光栄なことでお引き受けした次第です。

しかし皆さん、魂と言うのは一つの言葉、一つの文字ですが、その意味するところは考えれば考えるほど広く、思えば思うほど深く、言葉としての問題としてだけでなく、やや哲学的考察も必要かと考えます。それには優れた先人・賢人達の行動・言葉から学びつつ推考していくことが大切です。

皆さんスポーツの一つに三段跳びと言うのがありますね。助走に続いて第一のホップ、第二のステップ、第三のジャンプで形成されますが、今日の話も順序として三段階に分けて進めたいと思います。

先ず助走に当る序言(前言)、第一にホップに相当する宮古高等学校の設立と盛島明長先生の御功績、第二のステップとして私の七転八起のこれまでの道のり、第三のジャンプとして著明な先達の思想、至言と本題の「南秀魂」について述べたいと思います。

盛島明長先生と宮高創設

歴史を考えますと、県立宮古中学校が首里一中、那覇二中、名護三中に続いて設立されたのが昭和三年、宮古高等女学校の設立は昭和十年となっております。

当初、農林学校をとの声もありましたが、将来の進学のためには中学をと盛島先生が御努力なされたと聞いております。

ここで盛島明長先生の略歴について少し御紹介したいと思います。先生は明治十三年（一八八〇年）に下地洲鎌でお生まれになり、以後宮古高等小学校、沖縄師範学校を経て明治四十一年（一九〇八年）に長崎医学専門学校を卒業され、翌年早々と盛島医院を開業されました。そして明治四十四年（一九一一年）には宮古医師会長に就任されております。

政治、経済、社会の真に混沌とした厳しい状況の中で、それまでの先達、特に盛島明長先生を中心とした先生方の筆舌に尽せぬ献身的御苦労には深甚なる敬意と感謝の心を奉げたいと思います。

あの門前の胸像の盛島明長先生は医師でもありましたが県議四期、衆議院二期勤められ宮中、宮高等の設立に一身を奉げられた崇高な遺徳を私達は忘れてはなりません。

宮中も昭和二十三年十七期生をもって終了となり新しい学校制度（六二三）で新制宮古高等学校となって宮中十八期の我々は新制高校二年に進級となりその後宮古高等女学校も合併いたしております。

高校生活と心がけ

戦前戦後の激動と混乱の中、今日まで歴代の校長・教職員の方々の並々ならぬ御努力のお陰で私達の今日があること、また恵まれた教育環境にある皆さんは先生方はもとより、御両親・御家族の暖かい御支援があればこそ深く感謝しなければなりません。

歴史学者によりますと数千年前の古代文明（エジプト、メソポタミ

ア、インダス、黄河)による農業革命が人類の第一の波、十八世紀のイギリスに始まる産業革命が第二の波、そして現在の情報革命を第三の波と呼んでおりますが我々はその波の中で生きていることとなります。

無数の情報の中から学問上最も基本的な要素を組織的に選択し次世代に教授、啓発するのが教育であり学校です。それを吸収理解して成長に役立てるのが皆さんの学習と言うわけです。

私が医師だから言うわけではありませんが、健康も病気も多くは生活習慣によります。同様に基礎学力も体力も生活習慣(平素の努力)によって作ることが出来ると言うわけです。高校の貴重な時間は大切にしなければなりません。

私が申し上げるのも僭越ですが、ヨーロッパのある哲学者によりますと「ただ教えるのは普通の教育、方向性を示すのは優れた教育、そして卓越した教育は心に火をつける・やる気を起こさせる」と論じています。ただの Teaching でなく、真の Education の大きな意味があるわけです。

皆さんとしてはただ習い覚えるだけでなく己の方向性を見極め情熱をもって努力することです。ただの Learning と Study とは違うことを認識することが大切です。

これまでの宮古中学校の卒業生は八五四名、宮古高等学校の卒業生は今年度で二二九〇一名、合計二三七五五名となります。長い歴史の中で多くの優れた卒業生を送り出し、県内外で活躍されておりますことは我々の大きな誇りでもあります。

全国津々浦々に五十の塔はありますがそれが地震台風等に非常に

強く殆ど倒壊することが無いようですが、それは重い芯柱が塔中心にあつて、建物の揺れを最小限に止めているからと言われます。あの東北の大震災でも六三四米もある東京スカイツリーが少しの揺れですんだのも芯柱によるもので世界中の驚きとなっています。

これを人間に例えますと、しっかりした精神的支柱(信念)をもった人は事に及んで動ずることがないと言うことです。

私の七転八起の道のり

さて「南秀魂」の本題に入るために私の歩みについて申し述べたいと思います。

少年時代は軍国主義一色でした。昭和一九年に一家揃って台湾に疎開するも二十年八月十五日の終戦で九月には早々と漁船で宮古へ無事帰りましたが、困難な慌しい一年でした。十一月に宮古中学に入学。スノリ山の軍兵舎跡の教室でしたが楽しかったことが想い出されます(ノミの多かったのも想い出の一つです)。以後移動もありましたが本校へ移ったのは中学三年であつたと思います。その後六三三の新制度で一年後には新制高校二年生に進級と言う変則的な制度に複雑な思いがいたしました。昭和二十五年の卒業時に丁度契約留学生試験がありました。私は無念の次点で不合格でした。

しかし進学への思いは熱く、父の内地密貿易に便乗し小船で宮古を出発したのが三月三十日、那覇、大島、鹿児島と島々に夜間のみの航海で、ようやく鹿児島市に上陸出来たのが五月五日(私の誕生日)で約三十五日を要し、その時の感動は忘れられません。

しかし大学入試は終わっており、東京での一浪生活の後、京都大学

医学部を受験するもまた不合格、京大系列の三重大学医学部に入学、昭和三十三年に卒業、大阪赤十字病院で一年間のインターン、昭和三十四年に待望の京都大学耳鼻咽喉科に晴れて入局し、研究と臨床の多忙の日々となった。関連病院へも派遣されましたが貴重な経験になりました。

昭和四十年研究が認められ念願の学位を受領いたしました。これはゴールではなく医師としてのスタートであるとの緊張感でいっぱいでした。

あるNHKの「外国人による日本語弁論大会」での一米国青年による「道は己の前ではなく後にある」との言葉に深い感銘を受け、「己の道は自分自身で切り開け」との意味として私の金言となつていきます。

昭和四十二年沖繩へ帰って驚いたのは、当時人口約百万に対し医師は約三百人(現在二千余人)、耳鼻咽喉科はたったの七名(現在約百人)で真に社会の惨状と医療の荒廃でありました。それまでの進路への迷いは雲散霧消、開院を決意したのは言うまでもありません。

当初から離島・遠隔地を考え年中無休を標榜しましたが、二年目にして外来患者は一日平均約四百名に達し、真に不眠不休、野戦病院のような状況でした。

当時県立病院にも耳鼻咽喉科は無く全て自分で対応しなければならなかった。過労とストレスによる不眠と胃腸炎で苦しみ心身共に限界であったが、一人の医師として最も充実した時期であったと言えるかもしれません。

昭和四十七年沖繩の日本復帰後琉大病院の設立以来協力も得られ

るようになり、今日も息子が継続いたしております。

沖縄メデイカル病院設立

しかし、少子高齢化社会と言われながら、国・社会の対応は必ずしも十分ではありませんでした。私も県民の一人として、何か成し得ることはと模索して約七年、敢て当時医療過疎地と言われた佐敷町(現南城市)の新開の地に成人病(現生活習慣病)総合センターとりハビリ総合センターを二柱とする病床三百床の沖縄メデイカル病院を設立したのが昭和六十一年(一九八六年)でした。昨年がその創立三十周年となります。

当初大変厳しい時期もありましたが、生命への奉仕を旨に役職員一致協力でこれを克服し、今日着実に発展しつつありますことは誠にありがたいと感謝に耐えません。

さて、近年社会の急速な高齢化に伴って医療と福祉の連携が大きな課題として叫ばれるようになりました。私共もこれに応えるべく平成二十五年に新沖縄メデイカル病院を設立し、以前の病院は沖縄福祉総合センターに転用し、新病院と併せて名実共に沖縄メデイカル医療福祉総合センターとして大きく発展し、地域社会に喜ばれておりますことは心強い限りであります。

沖縄県医師会医学会総会会頭に任じられたのが二〇〇六年でした。これは毎年医学会会長の下で開催される医学総会ですが、その上の会頭は大変な重責ながら名誉なことで謹んで承諾した次第です。

学士会・アカデミア賞

学士会について喋る前に、沖縄のチャンプルー料理が多く食材でバランスの良い優れた健康食であることは皆さんよく知っていますね。そこでWHO世界保健機構によりますと「健康とは心身共に病が無いだけではなく、積極的に社会参加し、しっかりした精神的支柱をもっている状態である」と定義しています。それは己の主体性と広い人間交流も大切であると言うことです。

全日本学士会は、限られた学界や業界組織ではなく、全ての分野の人知と心を糾合し社会に貢献すべく、京大を中心に昭和二十一年「学問の自由と民主化」を旗印に発足し、「国際平和には国際交流」「科学技術の進歩には産業交流」「社会の発展には異業種交流」の三大理念のもと「学術文化・社会医療・国際交流」等各界の顕著な功績と献身的な実績の方々へのアカデミア賞の授与、中国での日本語弁論大会（十七回）更に個人又は団体に対する教育助成金制度等、地道な活動を続けております。

平成二年七月、図らずも全国日本学士会より「アカデミア医学賞」と言う私にとって身に余る光栄の授賞でしたが（五十八歳）、一時拝辞したものの私自身また同じ医療人への励みになればと謹んでお受けいたしました。喜びと共に責任の重さをひしひしと感じた次第です。また国・県の著名な方々との共著ですが、「日本の医道」「脳死」「我が人生」「沖縄日本復帰二十周年記念誌・泉」等、東京出版で参加出来たことは貴重な経験になりました。

「生まれて学び、学びて知り、知りて行わざれば全て無きに等しい」有名な言葉ですが私の好きな言葉です。

「真喜美」全て行為無がりせば無いに等しい教訓として常に自省自戒しております。

多忙を極める病院業務の傍ら全国日本学士会の役員としてお手伝いするうち平成三年に「アカデミア医学大賞」平成四年には文部大臣より感謝状と学術功労賞受賞と言う無上の光栄に身の竦む思いがいたしました。しかしこれも関係各位の御理解・御支援と役職員の協力によるもので感謝の念でいっぱいであります。

以後平成八年全国日本学士会創立五十周年記念に際し、元京都大学総長西島安則先生の会長就任と共に不肖私は理事長を拝命いたしました。これも当初お断りしたものの西島安則会長のお勧めと初代理事長があのお有名なノーベル賞の湯川秀樹先生であると聞かされるに及んで大きく心動かされありがたくお受けした次第です。

実はここで一寸とした逸話を申しますと、大先輩の元琉大学長砂川恵伸先生が学長就任の挨拶に母校の京都大へ伺ったところ、当時の京大総長は西島会長だったとのことで、西島安則先生、砂川恵伸先生との不思議な御縁で砂川恵伸先生には学士会を大切にしてもらっています。

以後西島安則会長が平成十三年御逝去されるまで十五年の長さにわたり親しく薫陶を受けられる幸運に恵まれたことは私の生涯の大きな宝となっています。

西島会長の御逝去に伴い私も辞意を申し出ましたが許されず、現在第十代会長森田喜一先生のもと前副会長の元早稲田大学総長清水司先生の(顧問御就任)後任として、副会長を拝命いたしました。

参考までに沖縄での受賞者は政治家としての当時行政主席の当間

重剛さん、実業家として元行政主席で沖縄電力の社長の松岡政保さん、医学部門として不肖私、学術部門として沖縄県民待望の琉大医学部を立ち上げた初代医学部長の大鶴正満先生の四名となっています。また本会沖縄支部も平成五年設立され、初代支部長に元琉大医学部長の大鶴正満先生、二代目支部長に弁護士の内啓邦先生、そして今元沖縄大学学長の狩俣真彦先生を中心に約百名の会員の年二・三回の講演会・交流会の活動を行っております。

話が変わりますが、文明の衝突・文化の摩擦は歴史の教えることろですが、想えば二十世紀は歴史上類を見ない程の科学技術の進歩、社会の発展がございましたが、一方では国際紛争と伝染病の猛威に悩まされながら経済第一、物質優先の時代で反面人口・食糧問題。環境問題等多くの課題が残されたのも事実です。それぞれへの反省から二十一世紀は人間中心、精神文化優先の時代になることが期待されましたが、今なお政治の混迷、経済低迷、社会の混乱と世は真に混沌とした状況であることは皆さんよく御承知の通りです。

そこで学士会のPRではありませんが、先程申し上げた三大交流の理念は今後一層重要性を増すものと考えます。

文化人との思想・言葉

これまで間接的話が続きましたが、歴史上著名な先人達の偉大な業績と考え方(思想)について少しふれてみたいと思います。

皆さん二十世紀の四大偉人について知っていますか。私も調べて初めて知りましたが、年代順に申し上げますと①生物進化論のダーウィン、②社会主義理論のマルクス、③医学の潜在意識発見のフロイト、

④物理学の相対性原理のアインシュタインとなっています。それらの偉人をはじめ多くの分野の先人達の知性、人間性の交流と集積、結合、融合によって今日の社会はなりたっているわけであります。

更に身近な偉人の功績、金言についても考えてみたいと思います。

①よく運・不運と言われますが、「運の中に偶然はない、人間は運命に出会う前から自分でそれを作っている」第十七代アメリカ大統領ウイルソンの言葉です。平素の努力こそがチャンスをつかめると言うことです。

②「天才は一%のインスピレーションと九十九%のパースピレシヨンである」有名な発明家エジソン(学歴小学四年)の言葉です。一%のひらめきは九十九%の努力・汗から生まれるとの名言です。

③皆さんよく知っている野口英世先生は幼少より苦学勉強若くしてアメリカへ渡り、多くの苦難を克服して梅毒菌の発見と黄熱病(アフリカの伝染病)の研究に献身的に一身を奉げた細菌学者ですが、その献身的な崇高な研究は全国民の尊敬の的となっている。

④「愚直なまでに自分の真実な道を正直に歩むことが大切である」小生学四年の学歴ながら機多の艱難辛苦を克服して一大事業を築き上げた(ナショナル電気パナソニック)経営の神様とまで言われた松下幸之助の言葉です。

⑤「人間はスペシャリストでもゼネラリストでもなく大切なことはヒューマニストでなければならぬ」これは何と日本最初のノーベル物理学賞湯川秀樹先生の言葉です。

⑥「何事も先ず行動」万能細胞でノーベル賞授賞の山中教授の言葉ですが、我々の心に直接ひびく強烈な言葉ではないでしょうか。

更に皆さんよく御承知の哲学者にして芸術家のゲーテは次の様な至言を残しています。

言わく、「物事には教え学ぶことが出来ることと出来ないことがある。それは感性を研き考える使命感である、また人間の本質は言葉ではなく行動である」これは人間等しく肝に銘ずべき至言ではないでしょうか。

ここで人類の知性の頂点にある先人達の至言には「あきらめない深究心・行動力・人間性の三つの共通点があり、大切なことはその根底には優れた感性があると言うことです。

さて皆さんが最も関心があると思われる、文系の人・理系の人について述べたいと思いますが、先ず人間に文系・理系の区別はありません。小難しい理屈は抜きにして、实例について述べますと、

(1) イギリスのサッチャー首相(亡くなられた)はオックスフォードの化学科出身で以後独学で弁護士となり政界に入っています。

(2) ドイツのメルケル首相は物理学者でもあります。

(3) 身近な例として全日本学士会副会長から顧問になられた清水司先生は商業高校から早稲田大理工学部へ進み早稲田大総長になられた方です。

(4) 本会の常務理事は元毎日新聞社社長ですが、農学部出身であります。

また医師から弁護士へ、その逆も多く見ることが出来ます。

ここで人間にとって大切なことは感性・心・やる気・魂あるところ文系・理系は関係ないと言うことです。

ここまで精神論について述べましたが、これは皆さんの成長期に

において最も大切であると同時に今日の本題である「南秀魂」とも関連するからであります。

南秀魂について

民族性国民性・県民性は夫々政治、経済、社会、宗教等、社会的環境と気候・風土等自然環境と合まった複雑な生活条件の中で長年にわたって培養されて精神的バックボーンとして成熟していくものと思われます。

我が島民性も同様であります。

宮古島市民の最も特徴のある島民性は「アラガマ精神と開放性」が共通する精神文化と考えられます。それは宮古島の離島、台風、地形等、社会的にも自然的にも厳しい条件の中での生活の逞しさと開放性(助け合い)の精神文化として培養されたのではないかと考えます。そこで思い浮かぶのは校内のあの石碑に刻まれた「知、徳、体」の力強い文字です。これは知育、徳育、体育の意味で、皆さんからすれば知を研ぎ徳を養い体を鍛えらるゝなりこれが一体となつて宮古高等学校の輝く校風となり、更にアラガマ精神と開放性と言う宮古市民の共通文化と融合して自然に培われた「向上心、行動力、助け合いの心」が渾然と成熟した「心意気」(損得ぬきでも尽くす潔さぎよい気心)が南秀魂の本質ではないでしょうか。

ここで宮高の校章について考えてみたいと思います。あの三本の矢とオリーブの葉は「知、仁、勇」の象徴と言われます。「向上心、行動力、助け合い」の南秀魂と合致するではありませんか。それは今私の心の誇りある宝となっております。

南秀魂のシンボルとして敢えてお一人をあげるとすれば、宮古高等学校の設立に献身的に御尽力されたあの胸像の盛島明長先生ではないでしょうか。

これから皆さんは色々な分野に進みますが、先ず健康第一にそして物事の判断に際しては損得ではなく、善悪を基準としてあきらめず最善を尽くすことが大切です。

御礼

最後になりましたが皆さんよく利用しているスマートフォンが発明家で天才と言われたステイブ・ジョブズの有名な言葉をお送りします。これはスタンフォード大学での講演での言葉ですが、曰く「ステイハングリ、ステイフリーツシユ」これは常に探究心を持って、何事も知ったかぶりするなと言うことです。

私のつたないこれまでの道のりは七転八起の繰り返しですが、あきらめず今日に至っております。南秀魂の心意気を自分の芯柱として少しでも社会のお役に立てるよう確かな歩みを続けて参りたいと思います。

長々と講演ならぬ講話とも説話ともつかぬ話になりましたが、皆さんの心に少しでも残れば光栄に思います。

今日は本当にありがとうございます。

平成二十九年(二〇十七年)二月一日

於 宮古高等学校

